

平成29年度 九州高校選抜大会 審判総括

2018. 2月 福岡開催

開催県、福岡県協会のご協力のおかげで大会も無事に終了することができました。各日のレフェリーミーティングで行われた内容をもとに、今大会の審判関係の総括をします。各県協会審判部および指導普及部との共有を図り、今後に生かしていただければと思います。

○・・・1日目 ◎・・・2日目 ☆・・・3日目

1 位置どり、および領域分担

○ゴールエリア際の判定は、GR に任せる。CR が罰則相当の違反に気づいたとしても、GR の判定を待つ。

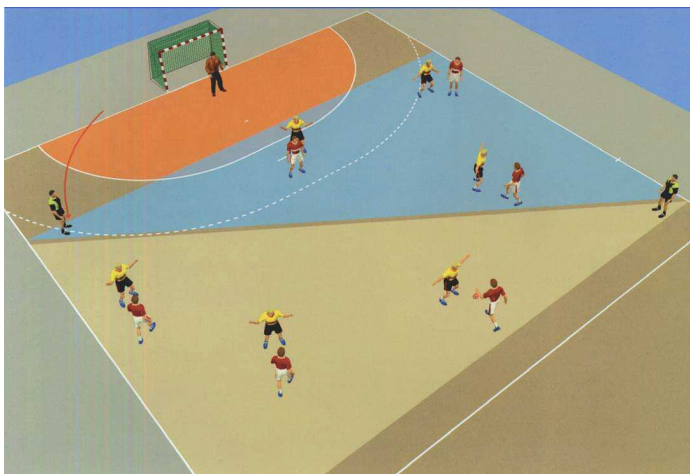
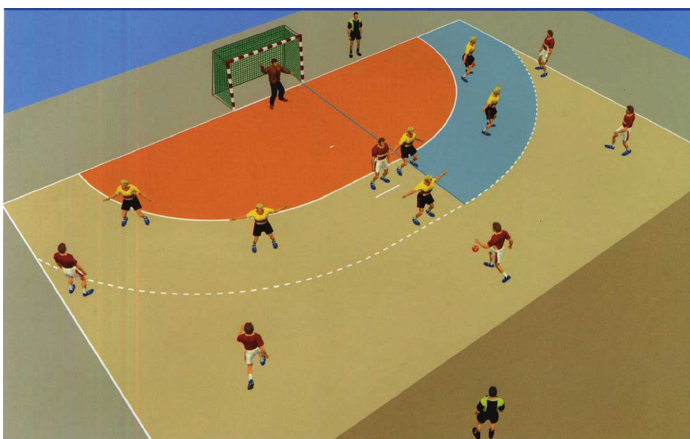
○シュートに対する違反行為に対し、罰則が必要な場合も、GR が判定する。

◎マンツーマン DF やオールコート DF への対応。領域分担。退場者が出た後や、チームタイムアウトのあとに起こりやすい。心の準備。

◎前後半開始のスローオフは、コート中央付近で。ボールを持っているプレイヤー、オフィシャル、ペアレフェリーのすべてとコンタクトがとれる位置で。オフィシャル席付近ではない。

◎指し違いが起こる原因・・・①エリア際の判定を CR がする ②ペアに近い位置の判定を、遠いところから判定する ③経験の浅いペアをカバーしようとベテランが吹く等。領域分担と、「ここは自分の責任領域」とそうでない場面という認識の切り替えが必要。

☆倒れているプレイヤーを放置しない。シュートを打ったプレイヤーが倒れたままの場合、近くにいるレフェリーが視野の中に入れておくこと。次の試合の中断までに起き上がれない場合は、タイムアウトをとり、コート外に出るように促す。すぐに起き上がれないのだから、コート上での治療行為の必要はない。



2 判定基準およびその伝達方法

○ GR が笛を吹き、プレーを止め、OF、DF 双方に注意を入れた場合は、必ず明確に両者に確認する。必要な場合は CR がフォローする。

○ DF がゴールエリア内で防御行為を繰り返している場合は、ボディランゲージを用いて明確にプレイヤーに伝える。身体接触が激しい領域、押し込まれてからの、ある

いは双方がもつれてから、ゴールエリア内に入ることもある。特に GR は、最終的な結果ではなく、過程を重視した見極めを。

- YC、退場、7 mスロー時は、何の判定だったのか、大きく1回ゼスチャーをすること。
- 後半の勝負時で、「双方のチームに最高のパフォーマンスをしてほしい」のであれば、前半のうちにそれを阻害する行為は排除する。「開始1秒から、2分間退場や RC はあり得る」はこのためである。レフェリーは的確に見極めて判断しているが、チームから罰則以上ではないかと求めてくるケースが多い。「4 その他」に記載しているが、コーチも現在のレフェリングのあり方について知っていくことが必要。
- 単身速攻に対し、激しい接触があった。レフェリーは2人寄って協議し、DF を2分間退場にした。すばらしい対処であった。

<効果> 感情的な判定にならない。2人の見解であることを伝える。

双方のチームに緊張感を与える。かつ、安心感、納得につながる。

<判断基準>

・ RC にするか2分間退場にするか ・違反行為の質 ・違反された選手への影響

◎女子の場合、キャッチしてからの1歩目を特に着目する。0なのか1なのか。それからのステップの判定につながる大切な要素。

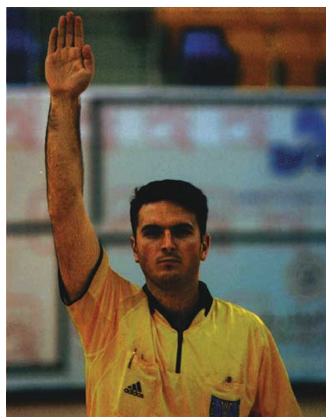
◎（資料にも記載しているが）身体接触の際の第1の着眼点は、防御側の位置である。接触の際、止まっているか、動いているか、エリア内か外か、腕の構えは 等。ボールと OF を追っていると DF が遅れているケースや、エリア内に押し込まれたケースなのかが正確に判定されない。



3 立ち居振る舞い

○相手は高校生、判定の質により笛の吹き方には強さがあるが、プレイヤー個々への対応には柔らかさが必要。柔らかいゼスチャー、表情、近よりかた 等。

○得点の手の上げ方、方向指示、ゼスチャーの仕方。明確にそして美しく。鏡などを見て、自分の姿を客観的に見つめる。



○ターンオーバーのあと、ボール、違反を起こしたプレイヤーから目を離さない。

○両チームのプレイヤーがもつれて倒れた場合は、近寄る。二次的な違反行為の予防になる。

○2分間退場の後は、退場したプレイヤーがコート外に出るまで見届ける。

○ペアの片方がタイムアウトを取った場合、もう一方のレフェリーは、時計が止まっているかを確認する。これは、試合再開時に時計が動いているかを確認することと同じ。



- ◎速攻の後の得点の判定は、すべてゴールライン際で行う気持ちで（もちろん追いつかないケースもある）。追いつこうと思わず、走りがおろそかになり怠慢と思えるケースあり。得点かどうか微妙なケースも、近くにいればいるほど説得力がある。
- ◎正しい観察をして、正しい判定をしているという自信があるならば、それに対するチーム役員のクレーム（コンタクトではなく、明らかなクレーム行為）には毅然と対処を。チーム役員の YC は重罰ではない。TD に任せるのではなく、主導権はレフェリーがとるべき。スポーツマンシップに反する行為を放置することは、ハンドボールがスポーツでなくなってしまう事へとつながる。

4 その他

- ◎最近のレフェリングの傾向を各県のトップレフェリーとコーチ（指導者）で共有を。罰則の適用の有無については、8：3(d)「違反行為の影響」と記載されている。

「平成 30 年度 審判員の目標」の中では、以下の点を指導委員会および審判委員会で共有している。



競技規則第8条「相手に対する動作」は、攻撃側、防御側の双方にあてはまる。

レフェリーは、「身体接触の際、両者の位置関係」はどうであったのか、また、違反はあったがその「違反を受けたプレーヤーへの影響」はどうであったのかを、正しく見極めなければならない。

我々レフェリーにとって、ハードプレーとラフプレーの見極めを行う際の大切な判断基準となるのは、以下の示すものとなる。

①シュートを打つプレーヤーのボディーコントロールは失われているかどうか

⇒シュートを打ち切ったかどうか

②シュートの後に、動けないほどの影響があるか否か

⇒DFと接触していても、ボディーコントロールを失わずにシュートを打ったならば、その結果、シュートを外したとしても、競技は中断しない。「違反があったから」ではなく、違反はあったが、それは「影響があったかどうか」という事実判定が根拠となる。

もしも、ボディーコントロールを失わずにプレーできているならば、レフェリーは、スピーディーな「ゲームの流れを重視」し、7mスローの判定や罰則の適用などにより「安易に競技を中断してはならない」。

レフェリーは試合中、試合の局面、プレーの質等を踏まえながら総合的に判定を下している。コーチ（指導者）に対し、レフェリングの傾向について共有していただきたい。そして、この内容は審判サイドのみならず、コーチ（指導）とも検証していきながら取り組んでいる内容であることも伝えていただきたい。

2018年2月4日

九州協会審判長 福島亮一